<< 3歳児　　もも組>>

雲の早さ

風の強い日にウッドデッキで遊んでいる時、保育者と友だちがお腹をさすったり、一本橋こちょこちょをしたりして遊んでいると、「僕にもやって」とにこにこしながらA男が言ってきた。ウッドデッキに横になった瞬間にA男は、「先生！見て！すごく早い！」と驚いた様子で歓声を上げる。保育者のそばにいたB男も空を見上げる。するととても早く雲が進んでいた。保育者は「わっ！！本当だ！すごく早いね。びゅんびゅん通り過ぎていくね」とA男の思いに共感する。A男は「すごいすごい」とワクワクする気持ちを抑えられない様子であった。次第にその気持ちは雲の素晴らしさに引き込まれ、落ち着いた様子になるが、雲を見る目は輝いていた。A男とより近い気持ちになろうと保育者はA男の隣に横になる。その姿を見てそばにいたB男も横になる。B男は驚きを隠しきれず、口を開け、目を輝かせて見ていた。雲を見つめる二人の顔つきはとても穏やかであり、しばらく言葉もなく、ただただ偉大な雲を見つめ、ゆったりとした時間が刻まれていた。

～事例からわかったこと～

☆ 共感してくれる身近な人（保育者、友だち、家族など）の存在が興味を深め、育ちになっていくと考える。

☆ 保育者と子どもの心の交流の中で、感動がより大きなものへとなっていった。

◇ 寝ころんでみたことで、いつもと違った角度で自然をとらえられた。
（色々な角度から自然を見ることで、新たな発見がある。）

<<４歳児　　ゆり組>>

親子で製作活動

普段から散歩に出かけ、子どもたちが集めてきたどんぐり・まつぼっくりなどの木の実や落ち葉を使い、学校へ行こう週間を利用し親子製作会を計画した。学校へ行こう週間ということもあってか、保護者も参加しやすかったようで、クラスの半数以上の保護者の参加があった。子どもたちも自分の保護者が来て一緒にすることをとても喜んで製作活動に積極的に参加する姿が見られていた。親子で楽しめるようにいくつか簡単に作れるものを用意した。中には何をすればいいかわからずに始めは戸惑う保護者もいたが、作り始めると、どの人も楽しんでいる様子がうかがえた。保護者と共に素材に合わせて付け方を工夫したり、何を作るか相談したりしながら、できあがりをとても喜んでいた。

また、仕事や家庭の都合で保護者が来られない子を心配し、保育者も気にかけていた。Ｙ男もいつもはなかなか席に着こうとしないのに、お母さん達の姿が見え始めると早々と席に着いた。しかし、Ｙ男はしばらくすると自分の保護者が来ないと更に実感したように淋しそうな表情を見せていた。するとＴ男のお父さんが声をかけてくれたことをきっかけに自分から甘える姿も見られ、嬉しそうに活動に参加できたので安心した。どの保護者も自分の子ども以外の面倒もよく見てくれ、他の子と接する事で保護者のいつもと違った姿を発見することもできた。

「お父さん、どうぞお座りください。」
「いいんです。みんなを見ますから。」
こんな会話が自然と生まれて嬉しかった！！

～事例からわかったこと～

☆ 身近な大人に進んで関われるようになるこの時期だからこそ、良い活動になった。行事を行う上で、子どもの発達を考え設定していくことが大切である。

☆ 発想や工夫も大人がモデルになる。

☆ 親子の触れ合いだけでなく「みんなで子育てしていく」ということも大切である。

☆ 保護者が参加できない子どもに対しての、保育者の配慮が必要である。

◇ 製作活動をするには、それまでに自然の中でたくさん遊ぶことが大切である。

◇ 大人自身も経験が限られているので、園が様々な経験を提供する場になっている。

＜＜５歳児　　さくら組＞＞

木の穴から…

夏の間虫かご、網を持って走り回る姿が見られた。見つからなくても、網やかごを持っていることが嬉しい様子や見つかると大喜びで友だちに自慢する姿が見られた。木に着いているぬけがらを集めたり、植物のポットを動かしその下の土の様子を見ている。そんな遊びが毎日繰り返された。

園から２０分程歩いたところにある公園。遊具は何もないが、草や木々が立ち並ぶ。子どもたちはそこが気に入り、たびたび散歩に出掛けた。

（１日目）

公園に着くと小枝を見つけ、剣や鉄砲にしてごっこ遊びをしている男児。振り回しているので多少の危険はあるが、５歳児のみであったので様子を見ていた。そのうち、木の穴を見つけた子どもと、小枝で遊ぶ子どもとが一緒に関わり遊び始める。「きのあなにようちゅうやむしがいるかな？」と子ども達。小枝で遊ぶ子ども達が、持っていた枝で大きな木を叩く。木を叩くなんて乱暴ではないか。しかし、子どもが思いを持って夢中で取り組んでいるので見守っていく。保育者も「でてきてー」「おきてきて」と子どもの発見に共感する。小枝で木の穴をつつくようになる。つついているうちに小枝が穴の中に入っていくようになる。保育者も小枝がスルスル中へ入っていくことの不思議さ、面白さに驚く。子ども達は３センチ、５センチ～10 センチと奥へ奥へ入っていく様子に、中に何かいることを確信し、興味・好奇心が高まっていく。穴に小枝をさし、どこからか見つけてきた紐で枝を結び、虫が出てきて小枝を伝うように“しかけ”を作り園へ帰る。

（２日目）

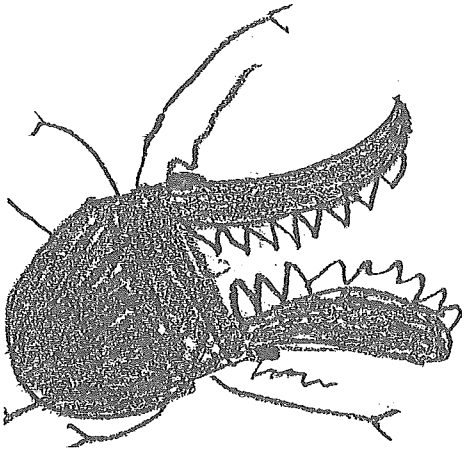
公園へ着くと“しかけ”たものがどうなっているか見に行く。「ひっかかったかなー」と子ども達。多少残念そうであったが“今日もやるぞー”と意気揚々。また木を叩くことが始まる。太い縄を見つけ木をこすり始める。一人でこすったり、左右をそれぞれ二人で持ち呼吸を合わせこすったりしている。「あったかくすればでてくるかな。」「タッチ、こうたい。」公園へ着いてから帰るまで４０～５０分遊んでいた。

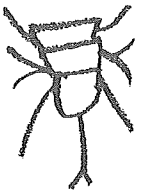
（３日目）

公園の近くまでいくと待ちきれない様子である。公園に着くと一目散に木の穴の所へ走っていく。「わぁ～」と高まる気持ちを声に出して走っていく姿もあった。この日は、木の近くにある大きな石を見つけ「いしのしたにもいるかな」「きっとつながっているかも」と、石の周りを掘り始めている。「きのチームといしのチームにわかれてみつけよう」と二手に分かれるよう、一人の男児が伝える。他の子どもも納得し分かれて行う。保育者を一人呼び、石を動かしてほしいと言う。動かないと「せんせいふたりくればうごくよ」と保育者二人も加わり石を動かす。

興味のものを見つけられるまで時間がかかったり、無駄があったりするんだよね。

ゴミのようなものでも遊びにつなげていってしまう。子どもってすごいね。





さすが５歳児！子どもたちの発想や発見はすばらしい！！

～事例からわかったこと～

☆ 子どもの遊びに対して危険を予測しすぐに止めてしまうのではなく、見守る、共感することの大切さを感じる。

☆ 小さな一つひとつを見逃さず、共感したり、環境を整えたり、援助したりしていくことが大切である。

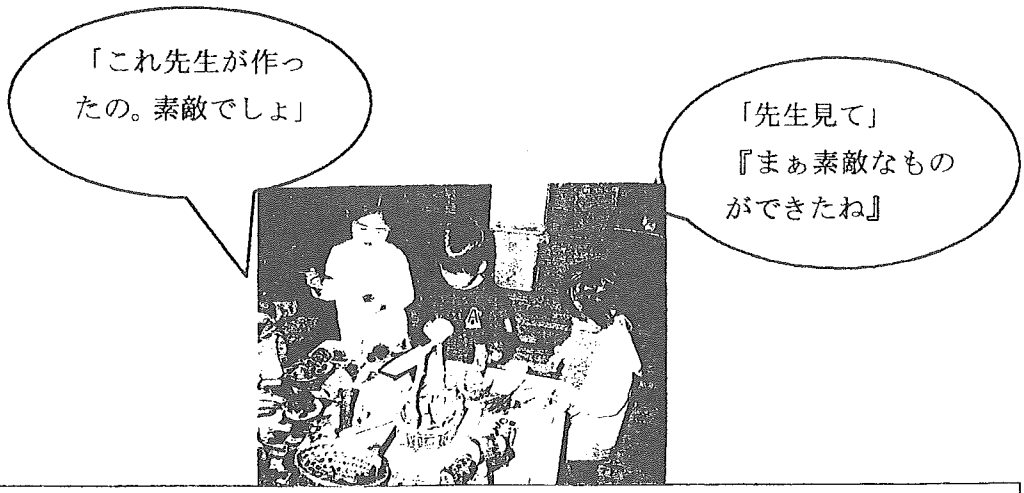
☆ 保育者が子どもの心の動きや言葉をきちんと受け止めてこそ、いろいろな遊びが発展する。

◇ それまでの経験の積み重ねが子どもの発想をより豊かなものにし、子ども自身の力になっていく。

(2) 保育室の環境から

《3歳児もも組》

９月はいろいろな木の実を拾ったり集めたりする事を十分楽しんだので、１０月は拾った木の実を使って楽しむことを中心とする。拾ってきた木の実や木の皮、ススキの穂、木の枝、木の切り株などを種類別に分けて製作コーナーを設ける。単に、コーナーを設けただけでは興味を示さなかったので、保育者が木で作った犬や豚を置くと、「これ何？」と興味を示し、子ども達が集まってくる。木で作った犬や豚の影響から子ども達は最初、木の切り株をつなげることが主だった。そこで、保育者がドングリやススキの穂をつけて楽しみ、子ども達に見せると子ども達も同じように楽しむ。皆、形は異なるが、同じような物を作る子が多かった。Aが木の切り株や皮を台にして、木の枝を縦につける。木の周りにドングリをつけようとしていたが、つかないため、保育者がポプリを出し、ポプリを木の周りにつける。初めて子どもが考え、創造して作った作品なので子ども達の前で紹介すると、他の子どもも思い思いに作り始める。コーナーを作ることで、子ども達もより、自然に目を向けるようになり、登園する時に、外で拾った実や葉を持ってくるようになる。子ども達の自然物への関心が広がってきていることを改めて感じた。



○ 環境の事例からわかったこと

- 保育者の姿を通し、やってみようと言う気持ちが出てくる。
- 子どもが興味を持ったとき、やってみたいことが可能になるような保育者の援助が必要。
- 子どもの頑張りや発想を皆に知らせることで、その子どもの意欲が増したり他児も興味が持てるようになる。
- 自然物を拾う、集める楽しさから使って遊ぶ、作る楽しさへ広げていく。
- 子どもの姿を通して家庭と一緒に育てていく。

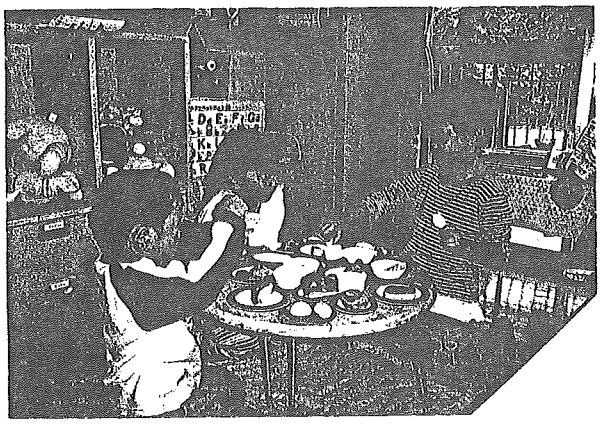
《4歳児ゆり組》

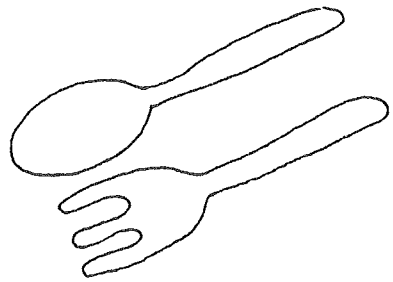
保育室ではそれぞれが好きな遊びを見つけて遊びだせるようにと、子ども達の好きな遊びをコーナーで（絵本、ままごと、製作、ブロック等）設けている。

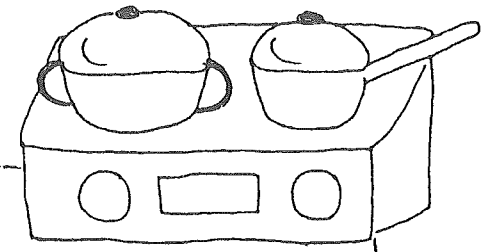
男児にはブロックコーナーが人気で友だちと作ったものを比べたり、バトルごっこをしたりしている。ままごとコーナーでは普段なかなか友だちと関われないT男が友だちの遊びを見ていた。遊んでいる前を行ったり来たりしているうちにいつもままごとコーナーで遊んでいるY子に誘われ、「これ持ってきて」と一緒に加わる。遊びがだんだん盛り上がり、『私はお母さん、私はお姉さん、ぼくお兄ちゃん』と役も決まり楽しそうな会話や表現が見られた。『自分の家』と言っては、ままごとセット、マットを持っていろいろな場所に動かしはじめる。ピアノの影や廊下の隅へと引越ししているようだ。保育者に重たいカラーボックスを運ぶのを手伝ってもらう他は、子ども同士で運ぶ姿があった。

「ここにカーペットを
ひこうよ」
「こっちは
ぼくの部屋よ。」

「今日はT君も入れて
よかったわ。」
さすがお友だちの力は
大きいね！







○環境の事例からわかったこと

- 自分達で場を作り遊ぶことで満足感を感じている。
- 園生活に安心しているからこそ好きな場を選んで遊ぶことができる。
- 自分の好きな遊びを通して友だちとのかかわりを大事にしている。

《5歳児さくら組》

ままごとコーナーの鏡台に興味を持ち、ごっこ遊びが始まる。廃材を使ってドライヤー、お化粧道具などを作る。美容院ごっこを楽しむ、綺麗になると結婚式などと言い、イメージを広げる。パーティーごっこ、ダンスごっこ、お姫様ごっこを展開する。毎日繰り返し遊んでいるので、カラービニールを用意する。そこからまたドレス作りを楽しみ、鏡台コーナーからいろいろな素材を取り出し工夫して使う。ドレスをかけるところを用意し、いつでも取り出せるようにするとドレスに名前をつけ遊び終わるとかけている。子ども達同士、くるくる回り踊っているのでデッキを用意すると音楽に合わせ、なりきって踊り会話を楽しむ。

好みの曲もあり自分達で選ぶ姿が見られた。踊りに合わせて男児が身近なもので音を鳴らすようになる。置いてあったとび箱を太鼓に見立てたり、ペンライトを見につけてきて振っている。クラスの皆の遊びになる。

「あっ音楽かけて」
「いいよ」
「ドンドン」
5歳児

子ども理解のためには細かなことも見逃さないようにしなくちゃ！

○ 環境の事例からわかったこと
- 発達を知った上で必要な環境や援助が見えてくる。
- 子供同士で遊ぶ空間や時間の保障が必要。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

1　まとめ

【環境の構成について】

○ 必要な環境や援助の在り方

・　子ども一人ひとり個性があり、様々なことに対して、興味の持ち方や関わり方が違うことを実践から見る事ができた。子どもの姿や発達を理解し、環境を整えていく事の大切さを感じた。

・　子どもは大人の姿を見て育つ。園内でのモデルの一つは、大人の私達、保育者である。保育者の一つひとつの姿が子どもの見本になる。挨拶など人との関わり方を子どもは見ている。保育者も日々の姿が大切である事を改めて感じた。自分自身を見つめ直すよい機会となった。

○　子どもとともに作り出す環境、子どもが作り出す環境

・　保育者がねらいを持って関わることや、新しい刺激を与える事は大切であるが、自分で見つけた事柄・場である事がより心をかきたたせ、それぞれが一致した時に充実した体験となる。

・　よく子どもを見ていると、自然に身近な環境（自然）を遊びの中に取り入れている。自然と関わる中で、発見したり、考えたりしていき意欲や自信につなげていっている。また、その一つひとつの積み重ねがとても大切である事を感じると共に年齢に合わせた内容、援助を考えていく事が重要である。

○ 自然環境と関わる中での育ち

・　子どもは自然という環境に溶け込み、イメージの世界を広げ遊んでいる。そこで子どもが何を感じ、考えているか読み取る力を保育者として高めていく必要を感じる。子どもがかかわる色々な場面を通し考えていきたい。（省察）

○ 社会と関わる中での育ち

・　どの年齢も、その年齢なりに共感しあえる仲間がいる事や互いに刺激しあい遊びを深めている事を遊びを通して見ることができた。人間関係の大切さを改めて感じた。その人間関係をスムーズに、大事にしていくには、保育者の援助の仕方が大切になっている。質を向上していかれるよう努力していきたい。

【幼児理解（子ども理解）について】

○家庭・保護者との連携

・　家庭ではなかなか自然との関わりが見られないことを感じるが、園で色々な形で伝えたり、家庭と共に楽しんだりしていくことで興味が持てるようになっていった。共感してくれる身近な大人がいることで、より子どもの興味も深まっていったことを感じる。

・　各年齢に合わせた環境や与えるタイミングを考え一つひとつの体験を大事にしていくことが大事である。

○　保育者自身の振り返り

・　保育者自身も研究をしていく中で敏感に自然に目を向けるようになり子どもに返していかれた点は、とても良かった。

2　今後の課題

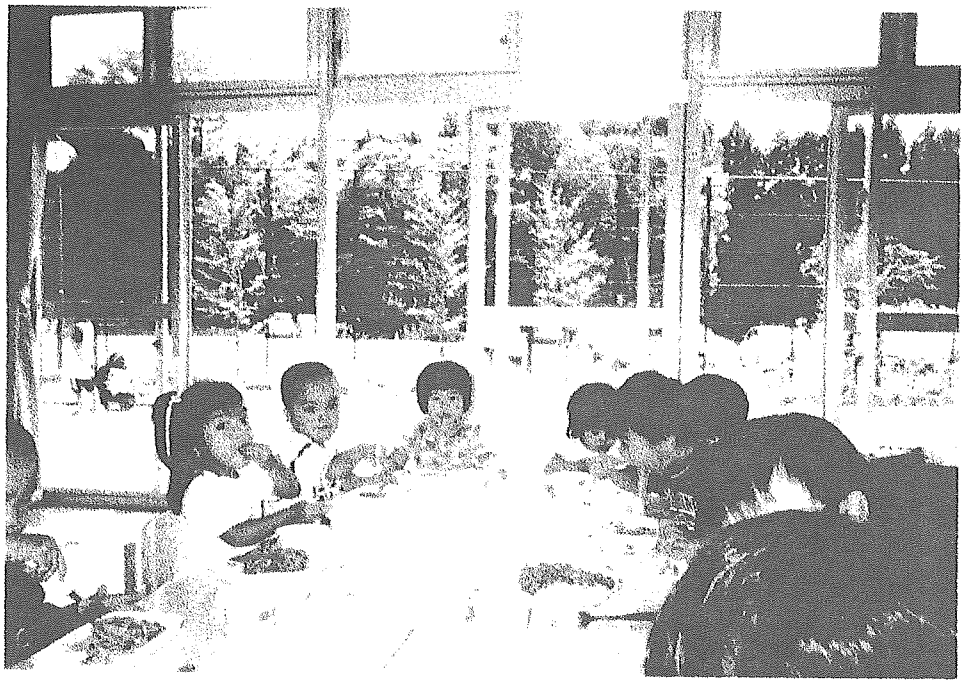
・　身近なところに豊かな環境がある。自然に子ども自ら関わろうとする姿があちらこちらにあるので、保育者がそこでの子どもの発見や学びがどのようにつながっているか、見ていく目を養っていきたい。

・　幼児学園の周りの自然や社会の環境について、「マップ」を作成したが、次年度は、このマップを活かし、計画的に園舎外とのかかわり（保育）を考えられるようにし、今後の保育に活かしていきたい。

・　保育者皆で子どもに関わり、話し合うことで多面的な、より深い子どもの理解ができるのではないか。本当の意味でのティーム保育とは何か、今後も探っていきたい。

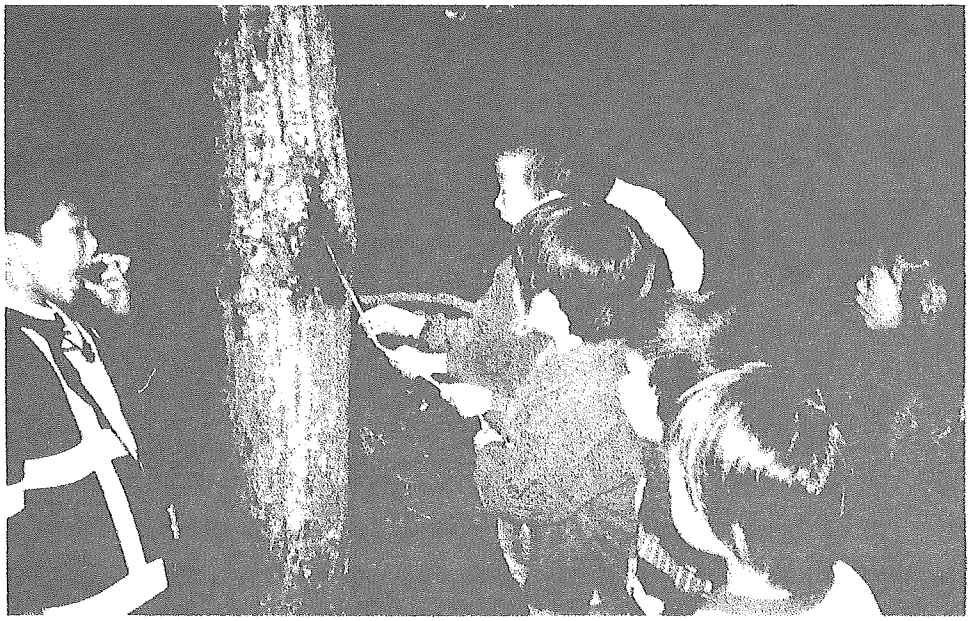
・　幼小でどんな子どもを育てるのか、それぞれの役わりや子どもの育ちを具体的にどんなことをして、どんなところが育ったのかなど、かかわりの場面を見直し、子どもの理解を深めていきたい。（幼小の連携）

今日からぼくたちの
仲間入り
1歳児が0歳児を迎えて…
0　1歳児

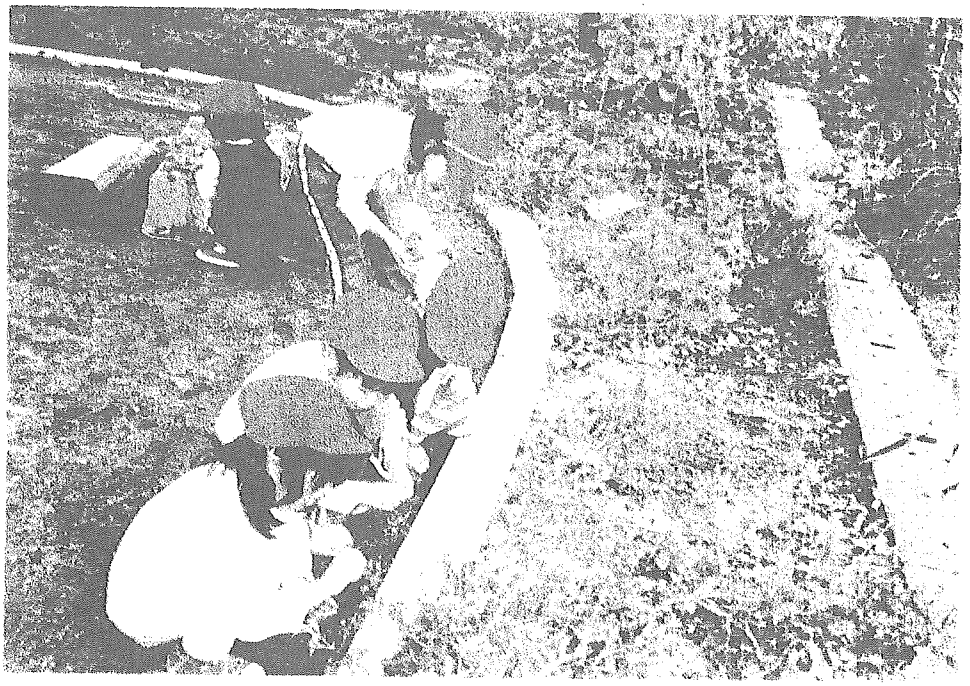


みんな楽しくお給食
「おいしいね」
2歳児

野原でジャンプ！！
心も体：動かして
近所の公園に散歩に出かけ
長縄跳びをしました
5歳児



木の穴を見つめる
子ども達
「木の中の虫
こてきてー！！
わあ～」
5歳児



道具を集めて
レストラン開店
豪勢なごちそうに変身
4歳児

散歩で集めた
どんぐりやまつぼっくり
並べたり積み上げたり
楽しんでます
3歳児

《ご指導いただいた先生》

目白大学教授	増田　まゆみ先生
箱根町教育委員会指導主事	呉地　初美先生
箱根町教育委員会指導主事	平塚　広　先生

《研究に携わった職員》

園　　長	佐野　眞弓	５歳児担任	熊澤　由起（リーダー）
０歳児担任	金井　潤子	５歳児担任	真野　雅美
１歳児担任	植田　裕子	臨時保育士	松下　佳代子
２歳児担任	齊藤　貴美	臨時保育士	勝俣　恭子
２歳児担任	小野寺二三代	臨時保育士	勝俣　由美子
３歳児担任	高緑　早苗	臨時保育士	宝子山　愛子
３歳児担任	磯部　さやか	子育て支援センター	小澤　真弓
４歳児担任	白川　三枝（サブリーダー）	相談員	冨米野　知子
４歳児担任	鈴木　麻衣子		

研　究　紀　要

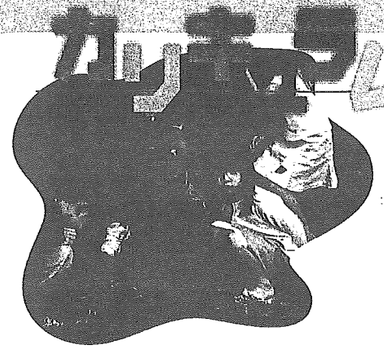
「一人ひとりの豊かな成長を願い
必要な環境の在り方を探る」
～自然や社会との関わりの中で～

発　行　日　　平成１６年１２月
編集・発行　　箱根町立仙石原幼稚園
〒250－0631
箱根町仙石原９８１
TEL0460－4－8386

参考資料（３）－ １．

２．カリキュラムに見る、これが合同保育です！

出典；「Ｎｏｃｃｏ」，Vol.2（№.１－６），フレーベル館



カリキュラムに見る、これが合同保育です！ ①

保育所・幼稚園のフレームを超えて

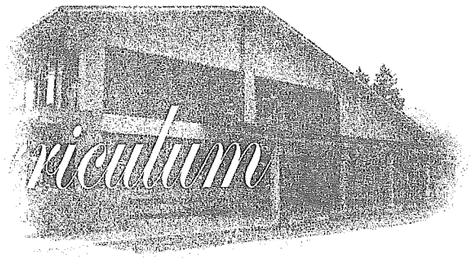
目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓

神奈川県箱根町に仙石原幼児学園が平成15年4月にスタートしました。乳児から6歳までの子どもが一貫したカリキュラムのもとに、仙石原保育園・仙石原幼稚園に所属する0歳から6歳までの子どもが一緒に生活し、遊ぶ合同保育が行われています。6回連載で、仙石原幼児学園の保育計画を通して、保育所・幼稚園という従来のフレームを超えて、多様な保育が動き始めている今、時代の変化とともに柔軟に変えていくものと、大切にしなければならないこと、変えてはならないことを明確にし、就学前の保育・教育のあり方について考えてみましょう。

（増田）

5歳児年間計画（仙石原幼児学園）

目標	・人（友だちなど）とのかかわりを深め、色々な体験を通して自主、協調の芽生えを培う。 ・さまざまな表現を楽しみ、意欲的、創造的に遊びや仕事に取り組み、豊かな感性を養う。	・保育者に見守られながら自分らしく生活する。 ・自然や身近な事象に興味や関心をもち、豊かな心情や知的好奇心・探求心を高める。 ・集団生活を通して、社会生活に必要な習慣や態度を身につける。
期	Ⅰ期（4・5月）	Ⅱ期（6〜8月）
ねらい	・年長になった喜びを感じ、園生活に必要なルールやマナーを守ろうとする。 ・新しい環境に慣れ、友だちとの遊びや生活を楽しむ。 ・身近な自然に触れて遊び、親しみをもつ。 ・保育者との信頼関係を築き、安心して過ごす。	・友だちとのつながりを深め、共通の目的をもって遊ぶ。 ・自分の力を十分発揮して、運動や遊びに取り組む。 ・自然や身近な環境をふれ合い、自分なりの考えをもって遊びを工夫する。 ・保育者との安定した関係の中で安心して自分の気持ちや考えを表す。
内容	・保育者や友だちとの安定した関係の中で、意欲的に遊ぶ。 ・新しい環境での生活の仕方や習慣を身につける。 ・自分の気持ちを友だちに伝えながら、好きな遊びを十分楽しみ、のびのびと表現する。	・同じ目的をもった友だちと相談して、遊びを進める。 ・自分の思いを伝えたり、友だちの意見も聞こうとしたりする。 ・色々な運動の仕方を知り、ルールを守って遊ぶ。 ・色々な素材や身近な自然にかかわり、自分なりのイメージをもって、工夫したり試したりしながら遊びを進めていく。
	・飼育物の世話をする。 ・花壇を作り、花の種や実のなる苗を植える。 ・園外へ散歩に出かけ、草花を摘んだり虫探しをしたりする。 ・草花で首飾りを作ったり、ままごとにとり入れたりして遊ぶ。 ・草花を使って母の日のプレゼントを作る。	・飼育物の世話をする（カメ・ザリガニなど）。 ・花壇や畑の水やり、草とりをする。 ・朝顔や野菜、苗などを植えたり、世話をしたりする。 ・土や砂、水、プール遊びをする。 ・近くの野原で遊び、おたまじゃくしやザリガニをとって遊ぶ。
環境構成・配慮	・年長になった喜び、緊張感や不安な気持ちを受けとめ、一人ひとりとじっくりかかわるようにする。 ・個々の心の動きや遊び（活動）を見守り、安定して生活できるよう子どもとのかかわりをもつ。 ・いろいろな場面で共感したり励ましたりしながら、年長としての自信がもてるようにしていく。	・自ら選んで取り組める場や活動を多くするとともに、一人ひとりが自分の力を試せるような場を設定する。 ・季節が満喫できるように、子どもたちの欲求に適応させて、室内外の環境を整える。 ・集団行動やグループ遊びなどの機会を多くもち、その中で自分の力が十分発揮できるような助言や援助をする。
家庭との連携	・クラスだよりを利用し園の方針や保育者の思いを保護者に伝えたり、連絡帳などで家庭での子どもの様子や子育てについて一緒に考えたりしながら、信頼関係を深めていく。 ・その日の子どもの遊びや様子をクラスの前のホワイトボードで伝えたり、登降園時に保護者と一言その日の話をしたり短い時間でもかかわりをもち、子どもの育ちを共有する。 ・保護者が安心して預けられるような雰囲気作りや、笑顔で対応し、保護者の心身の疲れを和らげるようにする。	
長時間保育への配慮	・朝早い子へは、保育者が身支度等にゆったりとかかわり、安定して一日を元気に過ごせるようにする。 ・年齢なりの遊びの確保をしつつ、小さい子との遊びや生活も考えられるよう援助していく。 ・年長児としての言動を認め、自信やプライドがもてるようにしていく。	・他児の見本となれるよう任せたり、支えたりしていき、意欲を高めていく。 ・頑張りすぎず、時には甘える等、クラスとは違った雰囲気にひたれるようにする。
地域とのかかわり	・散歩に出かけたり、地域の人にあいさつをしたり、ふれ合う。 ・小・中学校との交流を多くもち、互いに理解を深めていく。 ・老人施設との定期的な交流の中で、温かいまなざしを受けながら、やさしい心やいたわりの気持ちがもてるようにする。	・地域の行事に参加しながら、地域の人にふれ合ったり、伝統文化にふれたりする。
一体化への配慮	・登園時の違いに配慮しながら、クラスの活動を柔軟に展開するようにする。 ・一人ひとりの降園時間に合わせて対応する。その際、帰らない子にはそれまでとは異なる保育環境を用意する。 ・人数や時間に応じた遊びの投げかけを工夫し、臨機応変に行うようにする。	・幼稚園児が長い休みに入る時や土曜保育では、クラスの友だちがいない等、いつもと違った環境の中で年齢なりの遊びを保障すると共に、異年齢児のかかわりが深まるような環境を考え取り入れていく。また、保育園児の異年齢のかかわりが、全体に広がっていくよう援助する。 ・0歳児からの子どもとのさまざまなふれ合いやかかわりを大切にする。



カリキュラムを作って Curriculum

佐野 眞弓先生

共通の目標目指して

合同保育の中で大事にしたいことは、幼保の区別ではなく子どもの視点で考え一人ひとりを大切にした保育を行うことです。今まで保育所・幼稚園で行ってきたことを活かし合い、よりよい保育を目指しています。保育の計画を立てる時は、目の前の子どもたちに今なにができるか、どのような保育が大切か等の共通の目標をもつことです。そこで初めてお互いに培ってきたことが生きるのです。幼・保が一緒にいるということは、いろいろな見方、考え方ができるということです。子どもにとっても多面的に理解してもらえることや、保育者にとっては、子どもへの理解の深まりや自分の不足していることへの気づきとメリットがたくさんあります。理論より実践と、できることから少しずつ行ってきました。合同保育実践の基本はお互いの理解とお互いを受け入れる柔軟な気持ちに尽きると思います。

はじめに ～合同保育をとりまく状況

ここ数年、地方分権、規制緩和の進行など社会のさまざまな改革の流れを受け、保育所と幼稚園には、長年にわたって厚生労働省、文部科学省と異なる行政管轄のもとにそれぞれ展開してきた保育から、新たな関係の構築が求められています。平成10年、文部・厚生両省により「幼稚園と保育所の共用化等に関する指針」が出されて以降、運営上の弾力化が進み、各地で保育所・幼稚園の合築や併設が急激に進んでいます。その後、地方分権推進会議や構造改革特区構想などの提案を受けて、従来の保育所・幼稚園の枠を超えた多様な保育が展開されています。

現行の二元制度のもとで地域のニーズに応えるよう先進的に保育所・幼稚園の合同保育に取り組んでいる施設は、保育士と幼稚園教諭が協力体制を組み、工夫と努力が積み重ねられています。しかし、既存の制度の枠組みでの連携だけでは、子どもや保護者の実態に柔軟に対応できず、就学前の保育の課題が合同保育という特別の形態の中で、特に「教育委員会」主導で取り組まれることが多い状況の中で明らかに見えてきた課題がいくつかあります（合同保育に関する調査研究※）。保育所と幼稚園の合同保育について、「子どもの最善の利益を考えて保育する」という視点で、多面的に検討していきましょう。

総合施設はよいチャンス

さて、平成15年6月には、「幼稚園でも保育所でもない施設を平成18年までに～就学前の教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設」という記事が新聞一面トップに出され、平成17年からは、全国30か所で試行的に事業がスタートします。少子高齢社会を迎え、育児機能の低下と子育て環境が大きく変容している今日、総合施設をどのようにしていくかの論議は、あらためて日本社会における就学前の保育・教育の基本を考えるチャンスととらえることが大切です。

（増田）

※石井哲夫・金子恵美・増田まゆみ・森上史郎（五十音順）

カリキュラムを読んで Curriculum

増田 まゆみ先生

共に育ち合う一人ひとりの子ども

～保育所・幼稚園・家庭・地域が手をつなぎ合って

保育所と幼稚園に属する子どもが、ごく自然に保育者と一緒に生活を創造していくためのプランであり、限定された時間内での「幼児教育の計画」を集中的に行うといった保育ではありません。幼・保の5歳児が、園内の他の年齢の子どもとのかかわりはもちろん、恵まれた自然環境を活かし、隣接する小学校はじめ地域の人々とのつながりを尊重したプランになっています。多様な保育時間、子どもの背景にある家庭の状況の違いに対するきめ細やかな配慮が示され、家庭とのパートナーシップを大切にしながら保育を展開していくことが読み取れます。

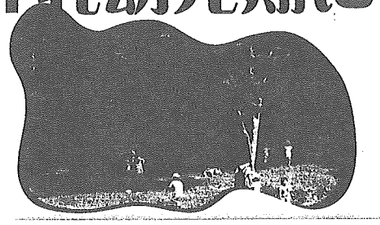
特区申請で、保育者は、保育所・幼稚園の併任となり、職員間の連携が次第にスムーズになっているため、職員の連携について年間のプランでは特に記載していません。

カリキュラムに見る、これが合同保育です！②

「乳幼児期に育てておきたいもの」を共有してプランに

～就学前の保育・教育を考える～

目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓



増田 まゆみ先生

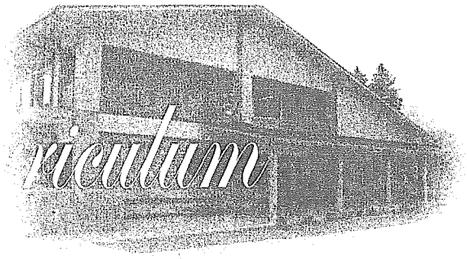
仙石原の5月は、新緑がまぶしいほどに美しい季節です。木々の葉が日に日に変化していくように、進級した3歳児も、初めて家庭を離れ入園した3歳児も、保育者の温かなまなざしと優しい援助を受けながら、その姿を変えていきます。

3歳児の発達特性（心身共にめざましい育ち・自我がはっきりしてくるがうまく表現や行動に表せない）を押さえ、保育時間など一人ひとりの違いと、保育の連続性・家庭との連携を大切にした生活プランを考えます。

平成17年度 3歳児 5月指導計画（仙石原幼児学園）

★…進級児　▲…新入園児

子どもの姿	●保育者の援助が必要であるが、少しずつ園生活に慣れてきている姿が見られ、食事や排泄などを自分でしようとする。 ●1人で好きな遊びを楽しむ子ども、友だちの遊びに興味をもちかかわり遊ぼうとする子どもなど、保育年数や発達、経験の差でそれぞれの姿が見られた。	●休み明け、泣いて登園する子どもがいるが長泣きすることなく保育者と一緒に遊び始める。 ●保護者から離れる際に、不安になったり泣いたりするが、保育者の側にいることで安心する。
ねらい	●保育者と一緒にさまざまな遊びを楽しむ。 ●身近な春の自然にふれる	★保育者に援助されながら身の回りの生活の仕方を知り、少しずつ自分でしようとする。 ▲保育者や園生活に慣れ安心して過ごす
内容	●戸外で十分身体を動かして遊ぶ。 ●好きな遊びや場を見つけて遊ぶ ●散歩に出かけたり身近な自然にふれる ●保育者とのつながりを感じながら安心して過ごす。 ●絵本や紙芝居を喜んで見たり聞いたりして楽しむ。 ●うたったり曲に合わせて身体を動かしたりする。	●保育者に手伝ってもらいながら衣服の着脱をし、午睡をする。 ★保育者と一緒に身の回りのことを少しずつ自分でしようとする。 ▲保育者とのかかわりを楽しみながら、身の回りの始末の仕方を知る。 ▲新しい環境に慣れ、遊びの中で保育者や友だちと交流を深めていく。
環境構成	●すぐに遊び始められるよう、遊具や用具を子どもの目のつきやすい所に出しておき、また安全に遊べるようにする。 ●子どもの好きな遊びや興味に合わせて、必要な物を用意しておく。コーナーやいろいろな素材を子どもの動きに合わせて再構成していく。 ●安心して好きな遊びが見つけられる環境、ほっとできる空間を作っていく。 ●一人ひとりに応じて、適切な休息や午睡ができるような場を設ける。	●個々の姿や体調に合わせて、十分休息できるよう時間を確保する。 ●声をかけ、スキンシップを心がけ、一人ひとりにかかわる時間を工夫する。 ●子どもが安心して排泄に行けるような雰囲気作りをしておく。 ●言葉のやりとりができる絵本や紙芝居などを用意する。 ●知っている歌やリズミカルで親しみやすい歌や遊び、曲を用意する。また、いつでも流せるようにしておく。
保育者の配慮	●一人ひとりが楽しく遊べるよう子どもの興味を捉え、一緒にかかわり遊ぶ。 ●スキンシップを図り、子どもが安心できるようにする。 ●新入園児に援助が多く必要になるので、進級児の様子を気をつけて見ていき、十分かかわりがもてるように工夫する。 ●子どもの話や表情から伝えたいことを感じ、気持ちや思いをくみ取っていく。	★新しい保育者や保育室で安心して過ごせるよう、一人ひとりの気持ちを十分に受けとめかかわりながら信頼関係を築いていけるようにする。 ▲初めての園生活に不安にならないように、一人ひとりの気持ちを十分に受けとめながら信頼関係を築いていく。 ▲生活の仕方や園生活のルールなどは、一つひとつをていねいに一人ひとりに合わせて伝えていくようにする。
家庭・地域との連携	●降園時間が異なるので、行事や懇談会等を利用して幼保の保護者が交流し合える場を作り、お互いを理解し合えるような関係作りの手助けをしていく。 ●登園後、幼稚園児の保護者は子どもの側についていることが多いので保育園児の子どもの気持ちを考慮し、さまざまな子どもがいることを家庭とともに考えていけるように伝えていく。 ●保護者が安心できるように、その日の様子をホワイトボード等を利用して伝えたり、口頭で子どもの姿を具体的に伝えていくようにする。 ●散歩に出かけた際には、近所の人や身近な人に保育者が積極的にあいさつをしたり、ふれ合えるようにする。 ●幼保の違いではなく子ども一人ひとりに合わせて育てていくことを理解してもらえるよう、クラスの子どもの姿をクラスだよりや園だよりなどで知らせていく。	
職員の連携	●全職員で子ども理解を深めていけるようにする。 ●会議ノート、連絡ノート等を利用し、スムーズに連絡が取れるよう工夫する。 ●それぞれの担任が一人ひとりとのかかわりを大切にしていくとともにその中での役割を柔軟に考え連携をとっていく。 ●必ず担任がかかわっていけるようシフトを工夫し、保育につながりがもてるようにする。	●お互いの動きを見て行動し、子どもがスムーズに活動できるようにしていく。 ●長時間保育に入る子どもが安定した気持ちで過ごせるように一人ひとりの日中の様子や健康状態等を担当職員に連絡する。 ●お互いの考えを出し合い、子どもへの共通理解を深めていく。 ●幼稚園児降園後などの時間を上手く工夫し、園全体や学年、乳児・幼児など細かく分けて話し合いの場をもつ。
一体化への配慮	●登園の時間に違いがあることを配慮し、支度や遊び等がスムーズに行えるよう保育者が対応する。 ●降園の時間に違いがあることを配慮し、遊びや生活の流れを柔軟に変えていく。 ●園で過ごす時間に違いがあることを配慮し、活動のもち方や遊びの環境を工夫していく。	●幼保の子どもで編成しているので各クラス複数の担任がいる。複数担任のよさを活かして子どもの遊びや生活の連続性を大切にした保育ができるようにする。 ●異年齢児とのかかわりを大切にする。 ●保育時間が長くなる子へは、他の子に迎えが来る中で、寂しくないよう他の楽しい環境を用意したり、保育者がかかわり、遊びを見つけられるようにする。



プランを考えるときに意識すること

保育所・幼稚園の合同保育の重要なポイントは、0歳から就学前までの子どもの発達の連続性を尊重し、保育所児のみの3歳未満児の保育と、3歳以上児の合同保育が分断されることなく、一貫性あるプランを作成することです。

そのためには、合同保育に携わる保育者が、子どもの育ち・子育て支援の目指す方向性を明確にし、共通理解することが必要です。

乳幼児期に育てておきたいもの

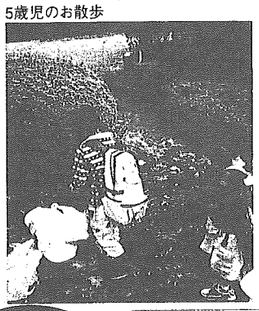
第一は「自分が大好き、自分はこんなにも愛されている、自分はかけがえのない存在である」という認識、第二は「自分をこんなにも愛し、世話をしてくれる大人を信頼する、人への基本的信頼感」であり、この二つは切り離しては考えられないものです。

子どもの出す欲求（生理的欲求・甘えや依存欲求）に、大人は応えていきます。その際、単に生理的欲求を満たすために機械的にミルクを与え、おむつを替えるのではなく、抱き、微笑みかけながら授乳するなど、愛情深く、スキンシップを十分にとりながら、子どもとの相互作用を大切にしています。子どもは、日常生活の中で大人が自分にしてくれたように大人を愛し、信頼するようになります。

第三は、こうした大人との相互作用によって情緒の安定が図られ、次第に自己への自信をもち、能動性を発揮して主体的に活動することです。大人の役割は、子どもにある活動をやらせるのではなく、子どもが能動性を発揮したくなるような環境を構成し必要な援助をすることです。

第四は、主体的な活動を進める中で、自分と同じようにかけがえのない存在である友だち・仲間との社会的相互作用によって、自己主張や自己統制力が育っていくことです。

5歳児のお散歩



一人ひとりの違いを尊重する保育のプランを

こうした共通理解をもとに、保護者と共に子育てをしていくことがプランに盛り込まれています。特に保育所児と幼稚園児の在園時間の差異が大きいことで、子どもの心理面に及ぼす影響をくみ取り、子どもが感じる寂しさや負担感に配慮した保育、合同保育を園での主活動と位置づけて早朝・預かり・延長保育を軽視することのない生活になっています。幼稚園児の登降園は、自然な形で順次行われ、既に登園している保育所児の生活を乱さないよう配慮し、また、保育所児が感じる寂しさを理解した上で、日課や環境設定に配慮しています。

（増田）

3歳児保育室

カリキュラムを作って Curriculum

佐野 眞弓先生

経験の違いを理解し、保育につなげる

一人ひとりの子どもを十分に理解し、大事に育てていくことは、私たちの保育の大きな目標です。3歳児の指導計画を立てるときも、幼保の子どもの今までの経験の差や保育年数を含めた子どもの理解をし、きめ細かい保育に繋げていきたいと思っています。経験の差とは量でなく、どんな経験をどの時期にだれとどのように経験してきたか、などです。0・1歳児から保育所に入所した子どもと、3歳児まで家庭にいた子どもとでは、かなりの経験の差があるはずです。

そんな時、考えたいのは、乳児期から幼児期の初め、3歳児ぐらいまでに育つもの、育てたいものについてです。それらを明確にすることは、3歳児の指導計画を立てる時にはもちろんですが、乳児保育の見直しに役立ちます。

幼保一元化になり、3歳児指導計画を立てながら、一番悩んだのは、乳児保育のあり方といっても過言ではありません。

カリキュラムに見る、これが合同保育です！③

家庭とのパートナーシップによる豊かな保育を

～多様な人とのかかわりと連続性を尊重するプラン～

目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓

6月は、雨の季節、箱根は気温の変化もかなりあります。この季節、晴れ間には散歩に出かけ、木の実、小枝などおみやげがいっぱいで帰ってきます。

この自然を使って、保護者とともに製作活動を楽しむ「木工教室」が、保育時間や保護者の就労状況など個々の違いに配慮して計画されます。多くの人とかかわり、家庭との連携・保育の連続性を大切にしたプランです。

増田 まゆみ先生

木工教室（保育参加）で、配慮すること

「すごいね、○○ちゃんのお父さん、のこぎりであんなに大きな丸太を切っているよ。」園庭の一隅にある木工コーナーでは、4歳の子どもが数人集まってきて、保護者の姿に見入っています。憧れと尊敬の眼差しで…。

仙石原幼児学園では、目指す園児の姿を「＊心身ともに健康な子ども＊優しく心豊かな子ども＊よく考え、意欲的に活動し、協調できる子ども」と掲げています。その実現に向けて6つの保育方法に基づき、計画が作成され、保育が展開されています。

その方法の一つが「家庭・地域との連携を図り、子どもたちの望ましい成長に繋がるように共通理解し…」であり、具体的な取り組みとして保育参加（保護者がわが子の生活し遊びを展開する日常的な保育の場に入り、共通の体験をする）があります。

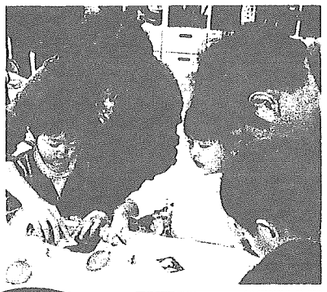
家庭・地域とともに創る木工コーナー

子どもたちが散歩で集めた自然物を活かすために、また、父親の参加を願っての「木工教室」が設定されています。木工コーナーは子どもの活動とともに変化しつつ、継続して置かれ、活動の連続性を尊重しています。大切なのは、1日限定の行事ではなく、登降園時の少しの時間を含めて、保護者の都合のつくときに、参加できるようにしていることです。保育者が一緒に活動したり、見守ってくれているという安心感の中で、父親や母親と一緒にかかわることで、子どもたちはモデルとして大人の多様な姿にふれる機会になります。

保護者にとっても、わが子と過ごす楽しさ、喜びを体験するとともにわが子の家庭とは異なる側面や、ほかの子どもとの共通点や特徴に気づくことになります。また、保育者の子どもへのかかわり方、玩具・用具などの準備や与え方を知り、子育てに関する生きた知恵やコツを身につけることになります。

最初はわが子だけとかかわっていた保護者も、周囲の子どもとのかかわりをを積極的にもつようになります。そうした状況を作るのも、保育者の役割です。

さらに、木工の素材を、家庭から保護者が、また、散歩で出会った地域の人が園へ持ってくるなど、家庭・地域の人と共に創る保育となっていきます。



佐野 眞弓先生

カリキュラムを作って Curriculum

保育参観に見る家庭との連携

家庭との連携は、子どもの成長や子育ての楽しみを共有するために大切です。保育で大事にしていることや園での子どもの様子を知っていただくために、お便りや保育参観を活用しています。保護者の就労などいろいろな状況の子どもたちがいる幼児学園では、時間に余裕のある母親から、もっと保育に参加したいとの声があります。

今回の保育参観でも参加した保護者から「自分の子どもはもちろん、ほかの子どもの様子も知ることができました」と、意見が聞かれました。こうして、子どもの成長はもちろん、親同士、親と保育者がお互いを理解する機会にもなっています。

また同時に参加できなかった家庭への配慮も大切です。登降園時に、自分で作った作品を展示し、見ていただいたり、親子で簡単に活動ができるコーナーを設けたりして、短い時間ですが子どもと親と保育者が楽しいひとときを過ごせるよう、いろいろなかかわりのできる工夫を大切にしています。

平成17年度 4歳児 週日案計画（仙石原幼児学園）

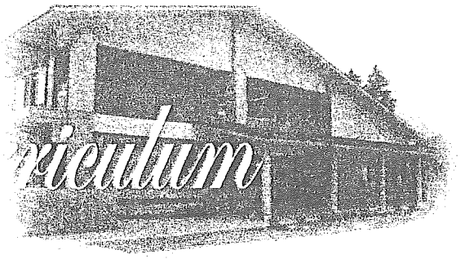
今月のねらい		• いろいろな遊びに興味をもち、自分から遊びを見つけて十分楽しむ。 • 身近な自然に親しみをもち、ふれ合って遊ぶ楽しさを味わう。 • 園生活で必要なことを自分でしようとする。			• 梅雨時を健康に過ごす。
前週の姿	• 登園時に数人、母親と離れられず泣いている姿が見られるが、保育者が十分かかわり受け入れることで安定し、遊び始める。 • 散歩で見つけた草花などに興味をもち、大事そうに持ったり、保育者に飾ってもらいうれしそうにする。	ねらい	• 自分のしたい遊びを見つけ楽しんだり、友だちとふれ合い遊んだりする。 • 親子のふれ合いを喜び、自然物を使って遊ぶ。 • 歯磨きや歯科指導に進んでかかわり、やろうとする。 • 友だちや保育者と一緒に自然とかかわり、戸外でのびのびと過ごす	家庭との連携	• 木工遊びについて保護者に知らせ、子どもと楽しい時間をもてるようにする。 • 歯科指導の持ち物を掲示板などで知らせたり、歯磨きについて関心をもてるようにする。
環境	• コーナーを設けて、いろいろな遊びが自らできるように • 保育室を気持ちよく生活できるように環境を整える。 • 飼育物は子どもたちの目に届く場所に置き、また流しの • 飼育物はクラスで大切にかかわれるよう、進んでかかわる • 製作（木材）コーナーでは必要な物がすぐに手の届く所に置き、じっくり取り組めるような場の工夫をする。	する。（ビーズ、製作、ままごと、ぬり絵や絵を描く　など） （衛生面、換気に注意する） 近くなど世話しやすいようにしておく。 子どもの姿を皆に伝える場を設ける。	• グループになって座り、少人数でかかわり刺激し合いながら楽しめるようにする。 • 木工教室後も遊びが続いていくよう、また、より広がるよう、同じような材料や場を設け、いつでもかかわれるようにしていく。また、お迎え時に参加できなかった保護者にも子どもと思いを共有できるよう、作った物を飾り、見たり、さわれたりができるようにしていく。 • 検診前、歯や身体の成長についての話をし、考えられる場を工夫する。		
予想される子どもの活動	• 保育者や友だちと一緒に好きな遊びを楽しむ。（ままごと、鬼ごっこ、遊具を使って、ヒーローごっこなどのごっこ遊び、大型積み木、水・泥・砂遊び） • 保育室で飼育している虫や植物の世話をする。保育者のまねをして優しく、ていねいにかかわろうとする。 • 散歩に出掛け、自然物にさわれる。（見る、集めるなど） • 自分なりに工夫し木材にさわって遊ぶ。		• お家の人と木工遊びができた喜びを味わう。 いろいろな（友だちの）保護者とかかわる楽しさを味わいながら製作をする。		• 自由に描いたり作ったりする。（小枝や木片、牛乳パックやカップ等を使って） • 歯磨きをていねいにしようとする。
保育者の配慮（連携）	• 朝の受け入れは特に4歳児だからではなく、一人ひとり • 登園時すぐに仕事に向かったり、家に帰る保護者が多い • 製作では、発達の違いなどによりかかわり方に大きな差が • クラスたよりで子どもの遊びの様子や自然物の遊びを知らせ、園での遊びが家庭へとつながるようにしていく。	←	の家庭状況を十分把握し気持ちを受け入れ、信頼関係を築いていく。担任一人が遅番のため、個々へ十分かかわるとともに全体の子どもの姿をしっかり把握していく。 が、数日木工にかかわるコーナーを作っておくことを伝え、短い時間でも自由にかかわれるようにしていき保育者も一緒にかかわっていく。 見られるので、一人ひとりの意欲や思いを大切に、認めたり援助したりしていく。	• 保護者が楽しんで積極的に参加しやすいように、簡単な内容の製作にしていく。 • 保護者が来られない子どもの気持ちに配慮しいろいろな人とかかわれるよう保育者が橋渡しをしていく。	• 歯みがきをしようとする姿を認め、進んでやれるよう援助していく。
	月	火	水　木工教室	木	
その日の反省	登園時M子は母親と離れられず泣いてしまう。保育者との関係を築き、安定を図っていかれるようにしていきたい。近くの広場まで散歩に出かける。あじさいの色の変化に気づいたり、桑やぐみの実を喜んで拾ったりする姿が見られた。保育者が小枝や木片を集めているのを見て、一緒に集める子が多い。保育者自らいろいろな自然に気づき、また子どもの発見に驚きや共感することは、とても大切であると実感する。	昨日拾ってきた木の実や花を使って、色水遊びが始まる。むらさきやピンク色になり、とても喜びカップやペットボトルに入れて並べ、お店屋さんごっこが始まる。砂場では自然と手足をつけはだしになって遊ぶ。（中略）個々の思いを大切にしながら友だちのことにも気づいていくよう援助していく。明日の木工教室が楽しみになるよう皆の集まりで話をしたり、子どもと共に園庭の準備をしたりする。	保護者（父親）の参加で木工遊びを開く。自分たちで拾ってきた枝を使い、のこぎり、とんかち、釘などふだん使えないような道具の使い方を教わりながら子どもも挑戦する。（中略）保護者が参加する行事では来られない子の気持ちを考え、数人の子どもに保護者一人などグループを作りみんなで行う雰囲気作りをしたことで、ふだんなかなか接することが少ない保護者とのかかわりをもつことができた。保護者が参加できなかったS君。お迎え時に飾ってあった自分の作った物をお家の人にほめられ、認めてもらうことでとてもうれしい様子であった。	園庭のコーナーには木工遊びの場がつくる。昨日の楽しかった経験から、早速取り組む姿がある。朝S子を送ってきた父親はそれを見て一緒にかかわってくれる姿も見られた。とても暑く、水まきをするとホースの水のトンネルを喜んで走り、水遊びも始まる。興味が大きく二つにわかれていたこともあり、保育者同士連携をもち、それぞれにかかわり遊びの様子で行き来できるよう柔軟に対応していく。それぞれの担任に作った物を見てもらったりかかわってもらい喜んでいた。	
反省・評価	• 木工遊びのコーナーでは、興味のある子かかわっていたものを、皆で共有することができた。今までの経験や発達により、かかわり方に大きな差が見られるので、個々に応じて楽しめるよう自由にかかわれるような場や、興味や用途に合わせたいろいろな素材を用意しておくようにしていきたい。	• 家庭と一緒に活動をしていく機会として、木工教室というひとときの場を基本に作ったが、参加が少ない部分もあり登園時に見たり、ふれたり親子で多少なりとも楽しめる場を設けたことで、その家庭なりに楽しむことができた　できるだけ家庭ごとに合わせた自由な環境を今後も工夫していきたい	• 週にわたって木工や自然物を使っての活動を取り入れた。子どもたち（その子）なりの楽しみ方で十分遊ぶことができたのは、今までの自然の中での実体験があるからだと考える。今後もふれ合える機会をたくさんもち、いろいろな形で表現できるよう工夫していきたい。		

カリキュラムに見る、これが合同保育です！④

幼・小の多様な連携を通して、生活・教育の連続性を尊重するプラン

～就学前の保育・教育を考える～

目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓



平成17年度　5歳児　幼児学園・小学校の連携プログラム（仙石原幼児学園）

★…子どもとの姿
▲…保護者と教諭の連携

年間目標	・小学生との多様なかかわりを通して、思いやりや、やさしさがもてるようになり、また主体的に行動しようとする ・幼小の職員が子どもの育ちや生活を知り、連続性をもってかかわれるようにしていく。	
期	Ⅰ学期	Ⅱ学期
ねらい	★年長になったことを喜び、保育者と一緒に校庭での遊びや小学生とのかかわろうとする。 ▲幼児学園を知ってもらう。	★小学生とかかわる楽しさを知り、安心していろいろな遊びをする。 ★いろいろな人と思いを通し合わせる。　▲お互いの育ちを知る。 ▲一緒に過ごす楽しさが感じられるような場がもてるような計画をする。
計画的交流	★放送クラブの幼児学園取材 ★小学校への散歩　▲授業参観 ▲保育参観　▲プール遊び	★運動会　★生活発表会　★絵本の読み聞かせ ★ふれ合いクラブとの交流　★音楽会　★お店屋さんごっこ ▲授業参観　▲公開保育　▲行事の打ち合わせなど
自然な交流	★園庭や校庭での休み時間などのふれ合い。 ★学級菜園を見せてもらう。　★あいさつを交す。 ▲お互いの生活の流れを知る。　▲声をかけ合う。	★散歩での交流　★固定遊具の共有　★運動会の練習を見る。 ★放課後幼児学園に遊びに来る。　★ポップコーンのプレゼント ★焼きいも大会　★金時クラブ(学童保育)との交流 ▲自然にかかわれる場や空間の洗い出し
子どもの経験する内容	・保育者と共にかかわろうとする。 ・校庭での遊びを知り、保育者と一緒に楽しむ。 ・小学生が育てている野菜の生長を見たり、苗を分けてもらい一緒に植えたりする。	・小学生に声をかけてもらったり、小さい子の面倒を見てもらったりして安心感をもつ。　・固定遊具の使い方を知り、保育者と一緒に楽しみ安全に使う。 ・お互いの運動会に参加し、一緒に楽しむ。 ・小学生の力強さや高い運動能力にふれることが刺激となり、いろいろな事に意欲的に挑戦しようとする。 ・いろいろな表現の仕方を知り、やってみようとする。 ・収穫を一緒に喜んだり、収穫物をご馳走になったりする。 ・金時クラブや学童保育の子どもと放課後に校庭などに一緒に遊び、親しみをもつ。 ・やさしく暖かくかかわってもらった事で園外の人へも興味が持てるようになる。
環境・配慮	・保育者が小学生の姿に目を向けをかかわりをもつことで、子ども自らがかかわりたくなるような気持ちがもてるようにしていく。 ・校庭や園庭の使い方を知らせ、その中でのかかわれる場面を大事にしていく。	・保育者が小学生や幼児なりの気づきや、相手を思う気持ちをさまざまな場面で捉えたり、感謝の気持ちをもったりしている事を子どもたちに広げていく。 ・ふだんの生活、遊びを取り入れた計画的交流になるようにしていく。 ・子どもなりに校庭をうまく使おうと考え、行動する姿があるので、任せていく中で、子どもが主体的にかかわろうとする姿を大切にしていく。
職員の連携	・ふだんの子どものかかわる姿を、幼小の職員が知ることのできる機会を大事にする ・互いの実態を知り、年齢に合った発達、環境を考えていけるようにする。 ・年間の指導計画を知った上で、柔軟性のある計画が進められるようにする。	・幼児学園を知ってもらえるよう、保育や研修に参加し、幼児・児童の育ちを考える（幼保小中合同研修会・公開保育）。 ・計画的交流が多くなるので、計画的な内容にとらわれず子どもの細かな心の動きを敏感に捉えて援助していく。 ・研修を通して子どもの育ちを共有する。
反省・評価	・小学生が保育者に安心感や関心をもつことでかかわる場面が増えてきた。 ・保育者のそのかかわる姿を見ることで園児も興味をもちその場を楽しむようになる。一緒に活動する機会を２学期も考えていきたいが引き続き一つひとつの小さなかかわりを大事にしていきたい。	

増田 まゆみ先生

7月は、子どもにとって水遊びは魅力的な活動です。プールでの活動も幼児学園と小学校の連携がとられているため、子どもはさまざまな刺激を受けながら、おおいに楽しんでいます。

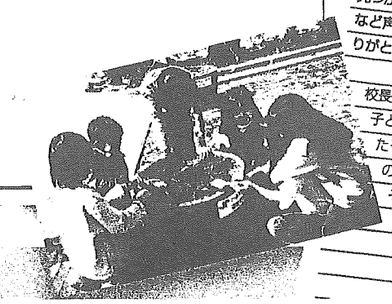
幼・小の意図的に、また日常の生活の中で実践する多様な連携を、保育者と教員が、1年間見通しをもって、また「豊かな心をはぐくむ」ことを意識して行っていくための年間プランが作成されました。

事例　小学生と自然なかかわり

・子どもたちと小学校校庭側の花壇にひまわりの種を植える。保育者が土を盲そうに選んでいると、「手伝って」あげるよ」と小学生。学校にも畑があるので、経験しているのか、「こうやって植えるんだよ」と5歳児に教えている。

・5歳児が大事なものをなくしてしまい大泣きしている。保育者も探すが見つからず困っていると、数人寄ってきて「ねえ、どこに置いたか覚えてる」など声をかけながら一緒になって探してくれ、アッという間に発見！「ありがとう」と5歳児はにっこりする。

校長先生にこのような姿を伝えると、朝礼で小学生に話しをしたとのこと、子ども同士のふれ合いが、保育者・教員とのかかわりへつながり、また子どもにかえっていく。そのくり返しの中で、幼児学園と小学校との壁がなくなっていくことを感じる。学校帰りに小学生が「ただいま」そして「トイレかして」と職員室にうれしそうに寄ってくれる。そんなかかわりが続いている。　熊沢由起（5歳児担当）



カリキュラムを作って Curriculum

佐野 眞弓先生

小学校との連携には、大きく二つの意味があると思います。乳幼児期一人ひとりに大切に育ててきたものを、小学校につなげ引継いでもらうこと。そしてお互いのふれ合いやかかわりの中で、その時期にふさわしい思いやりややさしい気持ちを育てることです。それには、お互いの理解と実際の活動が必要です。これらは相互関係にあり、子どもの引継ぎの話し合いや交流の結果お互いの理解が生まれ、お互いの理解があると引継ぎがスムーズだったり交流もよりいっそう可能だったりします。

開園以来２年間、無理をせず自然体での交流を心がけました。「また行きたいね」「手伝いましょうか」など子どもの声を大切にしてきました。今年は、一歩進んで連携のプログラムを作成しました。その中では計画的、自然的と交流を分けましたが、内容・配慮・職員の連携などを考えていくと区別の難しさも感じます。明文化することで、連携の大切さを再確認できました。

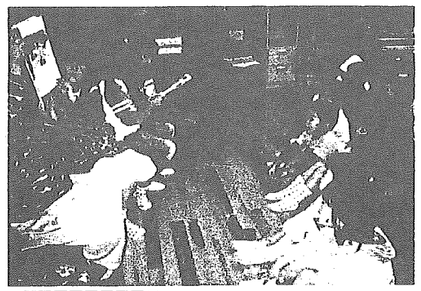
日常的な、自然なかかわりを大切に

仙石原幼児学園の子どもと仙石原小学校の生徒の、日常生活の中でふれ合う姿が述べられています。昨年の秋、私がたまたま訪問していた日、小学生が教師と共に年長児クラスに、小さな袋詰めにしたポップコーンを届けにきていました。自分たちで育て、収穫したトウモロコシをぜひ、幼児学園の小さな友だちにも食べて欲しいという小学生の意見により実現したのだそうです。その様子からも一人ひとりの子どもの心と心が、それまでの体験の糸でつながっていることを私は感じとりました。

保育所・幼稚園と小学校の連携というと、しばしば運動会や発表会等の行事に参加しあうことや入学前の学校訪問等が挙げられます。

勿論、こうした取り組みも、子どもの発達や学びの連続性を踏まえた就学前の保育・教育と就学後の教育を充実していくために意義あることです。しかし、限られた時間・回数での意図的・計画的な交流は、保育者や教師の思いが優先され、形だけの交流に終わりがちです。そこで、隣接し、幼児学園を卒園するとほとんどの子どもが入学するという条件を活かし、日常生活の中で子ども同士の多様なふれ合い・交流を積み重ねていくことを大切にしていき、人と人のつながりや、互いの育ち合いを基盤にした連携への取り組みが試みられているのです。

連携のキーポイントは保育者・教員の相互理解と協働の姿勢



日常的・継続的に取り組むことを可能するのは、園長先生・校長先生のリーダーシップのもと、保育者・教員がそれぞれのシステム・生活の中で、目指している方向性を理解しあい、一緒に実践・検討していこうとする意欲と行動力です。平成17年1月に中央教育審議会から「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」が出され、「○遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を活かした学びへ、更に教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。○幼稚園等施設の教員等と小学校の教員の合同研修等を通じて相互理解を深め、教員等の資質向上を図り、きめ細かな教育を展開する必要がある。」と示されています。こうした基本姿勢を具体化しようとしているのが、仙石原の幼児学園・小学校の試みといえるでしょう。

（増田）

カリキュラムに見る、これが合同保育です！ ⑤

子育て支援センターとの自然な交流を組み込んだプラン

～地域子育てセンターとの連携により、地域全体の子育て支援を担う～

目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓

増田 まゆみ先生

8月は、いつもより少人数で、ゆったりとした雰囲気の中で、園内の異年齢児や、地域のさまざまな人とのふれ合いが多くなる時期です。

子育て支援センターに以前、来所していた新入園児の受け入れや子育て支援センターとの自然な交流を組み込んだ1週間のプランです。（増田）

平成17年度　8月第2週(8/9～8/14)
1歳児　週日案（仙石原幼児学園）

	8月9日　子育て支援センター
ねらい	◎ 来園した親子が好きな場所で好きな遊びを楽しむ。 ◎ 遊びの中で在園児と自然な交流をもつ。 ◎ 親の気持ちに寄り添って子育ての楽しさを味わう。
内容	●水遊びを楽しむ。 ●親子で体を動かして遊ぶ。 ●好きな玩具で親子で遊んだり、ほかの親子とのかかわりを楽しんだりする。 ●保育者と一緒に手遊びを楽しむ。 ●在園児と一緒に遊びを楽しむ。
環境・配慮	●プール遊びのときは、水温や周囲の安全などに配慮する。 ●プール遊び後にスムーズに着替えができるよう、子どもの動線に合わせてタオルや着替えを必要な場所に準備しておく。 ●戸外では時間や場所に配慮し、快適に過ごせるようにする。 ●スキンシップをはかり、個々の気持ちを十分受けとめながら、安心して過ごせるようにする。 ●散歩では子どもの小さな気づきや、つぶやきにていねいに応えたり、保育者が言葉で伝えていく。 ●子育て支援センターを利用しながら、地域の子どもや大人と自然にかかわれるようにする。
配慮	●孤立しがちな親子には仲立ちとなり、友だち作りが自然とできるようにする。 ●やさしく声かけをし、気軽に話したり利用できる雰囲気を作る。 ●親子が遊びを楽しめるようにいろいろな遊びを用意する。 ●幼児学園の保育者と話し合いをもち、空間や遊びを共有できるようにし、好きな遊びを楽しんだり、園児とのかかわりを楽しめるようにする。 ●水遊びを楽しみたい子どもには持ち物を事前に知らせたり、支援センターで予備を用意し、誰でも参加できるようにする。 ●遊び出せなかったり親子のかかわりがうまくもてない親には、さりげなくかかわり方を見せたり子育ての悩みを聞き、それぞれに合った対応をする。 ●遊びを楽しむ空間とほっとできる空間を用意する。
家庭との連携	●新入園児の保護者とは、事前に家庭での食事、睡眠などの生活リズムを聞き、園での生活が子どもにとって無理なく進められるようにする。 ●プール遊びをすることもあるので、健康チェックカードの記入、必要な持ち物の確認や水いぼや疾病がないかなど、連絡を取っていく。 ●暑くなり食欲が落ちたり夏の病気が流行ったりするので、個々の園での状態を伝えたり、情報を提供していく。
反省	ちょうど午睡後の乳児が数名、担任と共に支援室に遊びに来て、いつものように自然に来園の子どもたちとかかわって遊び出した。親子のかかわり方がいまひとつうまくできないで悩んでいた親は保育者の子どもとやさしくかかわったりスキンシップを楽しんでいる姿を見てまねをするうちに、子どもの喜ぶ姿が見られ、少しずつかかわり方がわかったようであった。 障害のあるBちゃんが今日もおばあちゃんとお母さんと一緒に来所。今日の目的は入園に向けての園や保健福祉事務所の保健師さんとの話し合い。終了後ウッドデッキで0～1歳児と水遊びを楽しむ。お母さんやおばあちゃんは、その間も口うるさいほどに注意している。日々の育児でもひとときも目を離せない状態の子であることなど、母親や祖母の気持ちが痛いほどわかった。母親や祖母の気持ちを丸ごと受けて気持ちに寄り添っていきたい。
保育者の連携	●なるべく個々とかかわれる時間や空間の工夫をし、特定の保育者との信頼関係を深めていく。 ●午睡から目覚めた子は、支援センターや散歩に行くなどし、それぞれの子どもの睡眠と遊びを保障する。 ●プール遊びのときは安全に楽しめるよう時間をずらしたりしながら、保育者は少人数で対応する。 ●プール遊び後の沐浴・着替えなどがスムーズに行くよう連携を取る。 ●研修などで園にいなかったときは連絡を取り合い、前日の子どもの様子を把握できるようにしておく。
反省・評価	●新入園児が入ったことで、在園児も保育者を独占したがったり、不安になったりする姿があった。担任の間で連携を取りながら個々の要求を十分に受けとめていきたい。 ●新入園児は、以前支援センターを利用していたこともあり、親子とも園の様子を理解し、割合安心して過ごすことができた。 ●支援センターでは、手遊びを通してふれ合いながら、保護者は園での子どもの様子を知り、保育者は家庭での親子のかかわりの大切さを再認識し、お互いの理解の場になったので、今後も大切にしていきたい。
その日の反省	●9日(月)　在籍10人 今日より新入園児女児が、入園した。入園前も親子で支援センターを利用していたので、母子分離も思ったよりもスムーズにできた。支援センターに遊びに来ている顔なじみのお母さんたちが声をよくかけてくれたり、一緒にホールで遊んでくれたことも安心して過ごせた要因だと思う。十分にスキンシップを取りながら担任との愛着関係を深めていきたい。在園児の中には、不安定になってしまう子もいたので、子どもの小さな心の動きを見逃さず、安定して過ごせるようにしていきたい。 ●10日(火)　在籍10人 朝からよい天気になりウッドデッキに用意したプールで水遊びを楽しむ。数回目の経験なので、初めは水が苦手で入ろうとしなかった子も、保育者と一緒に楽しめることができるようになった。午睡から早く目覚めた子どもと支援センターに行くと来園した親子が手遊びをしていた。子どもたちにとって大好きな手遊びだったので、保育者と一緒に喜んで参加した。初めは戸惑い気味の未就園児も在園児の楽しんでいる姿を見て一緒に楽しむことができた。保護者とも子育てについて話ができたり、園児も地域の大人や子どもとかかわることができるよい機会になった。

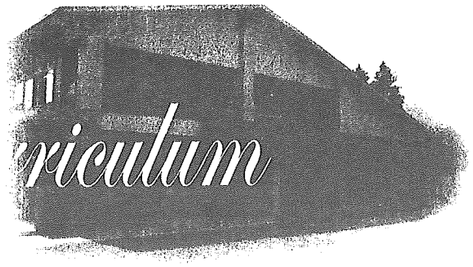
事例　親子のかかわりを見かけることで

支援センターに行くと、手遊びをしながら来園児がお母さんの膝の上で時折寄りかかったり、親子で見つめ合っている姿があった。A男はそんな親子の姿を見つけ、夢中で楽しんでいた手遊びをやめ、保育者に同じように甘えてきた。保育者もA男の気持ちを感じ、同じように応えてあげる。

母親が子どもを見つめるようなやさしいまなざしで保育ができるよういつも心がけているが、実際の場面を通し、その大切さを改めて感じた。

また、逆に保護者の中には自然な子どもとのかかわりがどうしたらよいかわからない保護者もいるので、ほかの親子や保育者の姿を通してかかわり方を知っていく点でもこの支援センターの役割は大きいと思った。

金井房子（0・1歳児担任）



多様な保育ニーズに応える
～地域のすべての子育て家庭を支援する

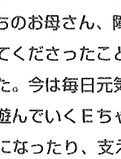
仙石原幼児学園では、関連事業として、「預かり保育事業」、「休日保育事業」、そして「子育て支援運営事業」が行われ、多様な保育ニーズに応えるよう積極的に取り組んでいます。子育て支援センターは、「子育て中の家庭が抱える育児不安などについての相談指導及び子育てサークルなどの育成支援を行うことにより、町全体の子育て支援体制の充実を図る」ことを目的に、幼児学園内の0・1歳児保育室とホールにつながる位置にあります。

私が訪問した日は、障害のあるBちゃんが、母親、祖母と一緒に支援センターに来ていました。暑い日差しのもと、ウッドデッキで在園児やセンターに来所した子どもたちが歓声をあげながら水遊びをしている姿をBちゃんは母親の手を自ら引っ張るようにしてホールのガラス戸越しに見つめていました。その姿に気づいた保育者が、呼びかけ、一緒に水にそっと手を入れると、水の感触が気に入ったのか、表情が変わり、その後は何度もくり返し、次第にほかの子どもと共に大胆に手を水の中に入れ、誘らしげに母親や祖母を見ていました。家庭では、障害に配慮し、Bちゃんの気持ちを受け入れながらさまざまな体験をすることは難しい状況にあり、次年度入園を視野に入れて保健福祉事務所の保健師と連携をとっていました。この日も、母親・祖母・園長・保健師が話し合い、専門医療機関に園長も一緒に行くことを確認していました。

センターと幼児学園の日常的な自然な形での連携に加えて、保健福祉事務所・教育委員会などとのネットワークにより、子育てで不安や悩みをもつ人、特にBちゃんのような配慮を必要とする子どもも、保護者・家族も、必要なサービスを受けられるようになりつつあります。

在園児も親子の遊びに参加

カリキュラムを作って Curriculum



佐野 眞弓先生

人々のかかわりが始まる支援センター

支援センターの利用者にはさまざまな方がいます。「おはようございます」と10時の開所と同時に毎日のようにやって来てくれるCちゃんとおじいちゃん。ほほえましい2人ですが、このごろは「娘が仕事に就かないので」とぽつりと話していくこともあります。4人の子どもを「たいへん」「たいへん」と追いかけながら、上の子の入園を楽しみにしている、Dちゃんたちのお母さん、障害のあるBちゃんは、支援センターにときどき来てくださったことが、入園に向けてのお互いの理解につながりました。今は毎日元気に登園してきます。幼稚園の降園後、親子でよく遊んでいくEちゃんの家。

大勢のかかわりの中で誰かが心の支えになったり、支えられたり。そして、それはやろうとしてやれるものではなく自然体で。そのためには枠にとらわれない場所や時間、人とのかかわりが必要です。誰もがみんな「子育てって一人じゃないんだ」って実感できたらいいなと思います。

年度途中入園児受け入れの工夫

低年齢児保育では、産休明け・育児休業明け保育などによる年度途中の入園が増加しています。そこで、園内の職員体制の組み方や保育のプラン作成においても、さまざまな配慮と工夫が必要です。センターに親子で来所していた体験が、有効に活かされています。センターの親子と1歳児クラスの子どもが楽しげに手遊びをしていると、4、5歳児がまるで保育者のように小さな友だちのテンポに合わせて、一緒に手遊びに参加する姿も見られます。

年度途中の新入園児を迎え、今までにはない新たな人と人のかかわりが生まれ、子ども相互のかかわりと共に、保育者と保護者も互いに刺激を受けて、それぞれの子育て・保育につなげていくことを学ぶプランです。

親も子も一緒に夢中です

カリキュラムに見る、これが合同保育です！ ⑥

合同保育のメリットを活かした研修プラン

～保育所・幼稚園職員の連携により、実践を核にした園内研修の実現～

目白大学/増田 まゆみ　神奈川県・仙石原幼児学園/佐野 眞弓

研究テーマ／『一人ひとりの豊かな成長を願い必要な環境の在り方を探る』～自然や社会とのかかわりの中で～

月	内　容	時間のもち方の工夫	共通理解の方法
4	昨年度の反省を踏まえ、園の実態と課題を考える 研究テーマを確定する テーマに基づき各保育者、クラスで検討	・幼・保の先生たちが互いに理解し合えるよう各クラスでの話し合いを多くもつようにする ・レポートでの提出をし、研究の係がまとめて全員に返していく	・実践研究・実践事例(春)の検討 ・職員会議での全員での話し合いをもつ ・臨時職員にも一緒に話し合いに参加してもらったり、話し合いの記録を伝えたりする
5	研究の方向性、具体的方法（研究計画）について 保育の実態を検討（事例研究）		
6	記録・レポートをもち寄り、検討する		
7	1学期の反省 テーマにそって事例などをさらに検討し、まとめる		
8	『箱根町各園園内研究中間報告会』 今後の進め方について	・幼稚園児の夏休みには、重点的に研究が進められるよう細かく計画していく ・臨時職員と連携し、年齢別、経験年数、全体会など各部会に分かれて話し合いがもてるようにしていく	・実践研究・実践事例(夏)(保育室)（秋）の検討 ・事例を通して、子ども理解を深めていく。 ・幼保の研修に互いに参加する
9	事例研究・記録の整理・資料作成		
10	研究発表会当日について		
11	考察・まとめ・資料作成・印刷・発表について	・幼稚園児の降園後（2時～）の時間を利用し、話し合いの機会をもつ ・保育園児のいる中での研究発表となるが、全職員で参加し学べるよう内容に応じて時間を配分する	・実践研究・実践事例（冬）の検討 ・園全体での共通理解、各クラスでの共通理解がもてるよう代表者会議などを利用していく ・職員会議での話し合い
12	2学期の反省・公開保育・園内研究発表会（箱根町幼稚園実際指導研究発表会）		
1	考察・まとめ・資料作成・印刷・発表について		
2	『各園園内研究発表会』		
3	今年度の研究の反省・成果と残された課題について話し合う 次年度へ向けての研究の方向性や課題を話し合う		
その他	毎月の指導計画の反省 自然マップの作成		

事例 3歳児（もも組）～雲の速さ～

風の強い日にウッドデッキで遊んでいるときのことである。ゴロンと横になったA男は、「先生！　見て！　雲がすごい速さ！」と驚いた様子で声をあげる。保育者も一緒に横になり、「すごく速いね。びゅんびゅん通り過ぎていくね」とA男の思いに共感する。A男は「すごい！」とワクワクする気持ちを抑えられない様子であった。保育者の側にいたB男も横になり空を見上げる。B男は驚き口を開け、目を輝かせた。次第にその気持ちは雲の素晴らしさに引き込まれていった。雲を見つめる二人の顔は、とても穏やかで言葉もなくゆっくりとした時間が過ぎていた。

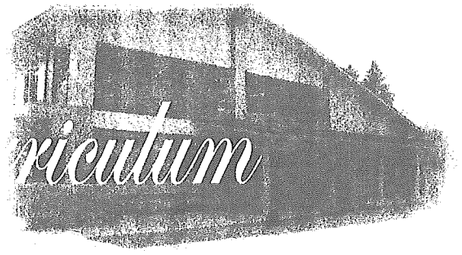
※学期に2回程、大学教授や指導主事を招いて勉強（研究）会をする。
※幼稚園児が降園後、園内研究会を開き、代表の職員が参加したり、職員会議で全職員で話し合ったりしていく。

増田 まゆみ先生

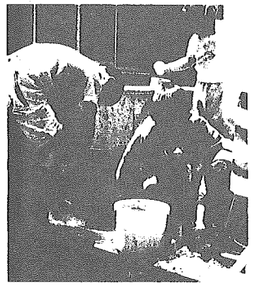
幼・保合同の保育がスタートして3年目となり、子ども、そして保育を担う保育者、地域の子育て家庭やさまざまな機関など、仙石原幼児学園の「多様性」が、保育を豊かなものにしていることを、それぞれの保育者が実感しています。

保育者が幼・保の併任という今までの枠を超えた体制のもと、長時間にわたる保育、休日保育などを実践しながら、時間のもち方の工夫や共通理解を深めるための方法を組み込んだ園内研修のプランです。（増田）

園内研究で大事なことは、日々の保育の中でのことを記録に残していきながら、それをもとにみんなで話し合っていくことなのだと思います。結果ではなくその過程が大切であり、子ども理解や援助につながります。リーダーの役割は、ふだんの保育の中でのつぶやきや思いを拾い上げながら、みんなで考え合うことです。それには職員間で保育について語り合えるような雰囲気が大切です。長いスパンで子どもを見ていき、深く理解しようとする保育者一人ひとりの姿勢が大切になると思います。



研修により何が変わるか



仙石原幼児学園の保育者は公立保育所・幼稚園、そして認可外保育施設での保育経験者と新任保育者で組織されています。幼・保共に佐野園長先生が園長を兼務し、園のトップとしての役割を担っていらっしゃいます。保育の場、保育経験の違いは、当然、一人ひとりの保育観・子ども観を作りあげていきます。したがって、幼児学園がスタートするに当たって、何よりも重要な課題は、多様な経験・価値観をもつ保育者たちが、「共通の保育観・子ども観」を、具体的実践を通して確認しつつ、保育を創造していくことでした。

乳児へのかかわりも、「子どもの心に寄りそいながら行うとは」「一人ひとりの子どもに応じた保育とは」など、保育の基本を具体的な授乳・離乳食の介助、外気浴といった場面について話し合いを重ねていきました。

また、仙石原幼児学園の周囲の自然環境は、四季折々の変化を子どもが感じ取ることができるほど恵まれています。園舎も、生活し遊びを創造していく場としてさまざまな配慮がなされています。しかし、その恵まれた環境が、「子どもにとって活かされた環境」になるためには、保育者の多大な努力と意識の変革を必要としました。周囲の自然と調和のとれた園舎に、かわいく、色鮮やかな室内装飾は、何ともしっくりいかない状況もありました。

育ちに課題のある子ども、個性の強い子どもを受け入れている幼児学園では、「個と集団、自己主張と自己統制とは」など、保育者の謙虚な保育への姿勢とよりよい保育を目指す意欲から、実践をもとに次々と課題が見えてきました。

研修は、保育者の意識を変え、子どもを見る目・保育を見る目を変え、保育を変えていったのです。それを象徴しているのが、事例「雲の速さ」でしょう。

研修の核になるのは園内研修

今、保育界は、研修の必要性が叫ばれ、さまざまな研修が実施されています。平成12年施行の保育所保育指針、幼稚園教育要領の伝達研修以降、幼保の保育者が相互に参加し合う研修が企画されていますが、積極的な動きにはなりえていません。幼児学園では、合同・一体化施設のメリットとして、幼・保双方の研修会参加が可能となり、保育者の資質向上と保育の質の向上に活かすよう、研修計画を作成しました。幼・保が長年わたって構築してきた文化の違いについて、既に述べましたが、両方の研修会に参加することで、多くの刺激を受け、今まで見えなかったものも見えてきたのです。

しかし、なんといっても研修の核になるのは、日々の保育実践をもとにした園内研修です。職場内であるため、互いに人間性・保育観・資質・能力などを把握した関係の中で行われ、実践を背景にしているだけにその効果は大きいのです。参加しやすくするための配慮と職員の協力体制、しかも園内にとどまらない、教育委員会、研究者など外部から多くの人と共に学び合うことが、内容の充実につながりました。

私が撮ったビデオでの子どもと保育者の姿から、真摯に保育を見直そうとする保育者の目の輝きを忘れることができません。私自身、多くを学ばせていただいている園なのです。（増田）

カリキュラムを作って Curriculum

佐野 眞弓先生

幼保一体化だからこその園内研究を

園内研究は保育を行うために大切なものですが、同時に保育を通して初めてできるという相互関係にあります。幼稚園では子どもの降園後、研究をする時間的余裕があります。保育所では時間の余裕はありませんが、保育時間が長い分、研究の実証や見直しなど学びの場が多くあります。

またいろいろな立場の人がいて、いろいろな考え方ができることもよいことです。一体化での、このメリットを活かさない手はありません。そのためのローテーションや話し合いの時間、方法に工夫が必要です。そしてなにより日々の保育が研究の基盤であることを大事に、研究のための研究ではなく、保育のための研究、保育からの研究を目指したいと思います。